

保存情報としての製本構造（3）

—西洋古典資料の保存のために—

The bookbinding structure as preservation information (3)

—For the preservation of western historical books—

岡 本 幸 治

OKAMOTO Koji

1. はじめに
2. 劣化を知る
3. 製本構造の基礎知識
 - 3-1. 冊子本の発生
 - 3-2. 「とじ」と「中身と表紙の接続」
 - 3-3. とじつけ 以上 No. 20 March 2000
 - 3-4. リンプ装
 - 3-5. くるみ製本 以上 No. 21 March 2001
 - 3-6. 見返し
 - 3-6-1. 未分化な見返し
 - 3-6-2. とじ見返し
 - 3-6-3. 巻き見返し
 - 3-6-4. 貼り見返し
 - 3-6-5. その他の見返し
 - 3-7. 背貼り
 - 3-7-1. 背貼り
 - 3-7-2. クータ 以上今号
4. 製本の動きと負荷 以下次号
5. 保存作業と製本構造
6. おわりに

3-6. 見返し

これまでも触れてきたように見返しの機能は製本構造と密接な関連性がある。西欧の歴史的製本においては、原則として「とじつけ」および「リンプ装」には「とじ見返し」が、「くるみ製本」には「貼り見返し」と「巻き見返し」が使われてきた。ここでさらに詳しく分析をして製本構造における見返しの役割と機能を把握したい。

見返しとは表紙のすぐ内側に配置されている装飾文様や色のついた紙葉と、それに続いて「中身」までの間に配置される数枚の白色紙葉の両方を含んでいる。必ずしも両者が存在するとは限らず、前者または後者のみで見返しが構成される場合もある²¹⁾。

原則として見返しは折丁の「とじ」工程で加えられる。見返しは中身の折丁と表紙のあいだに配置されて、「中身」を保護する役割と「表紙と中身の接続」を補完する機能とを受け持つ。表紙を開閉することで製本に生じる負荷が集中する部分でもあり、製本の保存性と重要な関連

性がある。

中世の写本では見返しが存在しない例をよく見かける。中世写本の製本²²⁾においては、表紙板の裏面に、厚い表紙革の折り返し、表紙板に固定された太いとじ支持体の末端、金属鋸の固定金具や留具の末端などが凹凸を形成しており²³⁾、その表面を被う必要がある。被うことが「中身」を保護することにもなる。表紙板の裏面を被う紙葉が折丁とともにとじられて表紙板の裏面に接着されていると表紙開閉にともなう製本の動作が安定する。従って見返しがその機能を発する条件とは、見返しの紙葉（冊子であるから折られた紙葉）が糸または接着剤によってとじられていること、見返しの紙葉が表紙裏面に接着されていること、であるとする。

3-6-1. 未分化な見返し

「中身」を構成している一番外側の折丁のうち表紙に隣接する外側紙葉が見返しに転化されている場合がある。これを仮に「未分化な見返し」（図20）と呼ぶことにする。折丁紙葉の一部は見返しとしての機能を担い、その他の紙葉は本文テキスト部分を構成している。この折丁は「見返し」であると同時に「中身」でもある。表紙を開閉することで生じる負荷は見返しノド部にかかるので、この「未分化な見返し」である折丁は負荷を直接に受け取ることになる。

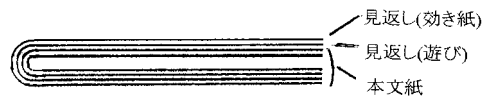


図20 未分化な見返し

3-6-2. とじ見返し

見返し紙葉が本文折丁から独立した折丁を形成していて糸でとじられているものを「とじ見返し」という（図10）。近世以降の歴史的製本に支配的な見返しの作りであり構造的バリエーションも多い。「とじ見返し」の折丁が表紙開閉で生じる負荷を受けることになるが、独立した折丁を形成しているために負荷を「中身」の折丁へ転嫁することがない。

3-6-3. 巻き見返し

「巻き見返し」は2つ折りにした見返し用紙を「中身」の一番外側の折丁に巻きつけて共にとじる（図18）。中世の製本（とじつけ）ではペラ1枚の見返し用紙を折丁に巻いただけの「巻き見返し」の例がある。「リンプ装」にも同様の事例があり、近世の「とじつけ」製本でも初期マール紙の見返しなどは同じ構造になっている。しかし「巻き見返し」は主として19世紀以降のくるみ製本に多く使われている。「巻き見返し」は上述した「未分化な見返し」の構造とよく似ており、見返しが巻きつけられた折丁が表紙開閉に伴う負荷を受けとめることになる。

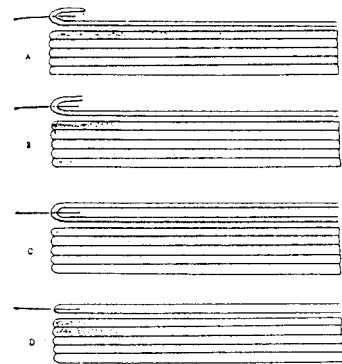


図10 とじ見返し

3-6-4. 貼り見返し

「貼り見返し」（図18）は2つ折りにした見返し用紙を「中身」の一番外側の折丁のにりづけしたものである。19世紀以降のくるみ製本に多く使われており、本を大量に製本するための機械化に適応した見返しの作りである。ここでは「とじ」工程以前に見返しを折

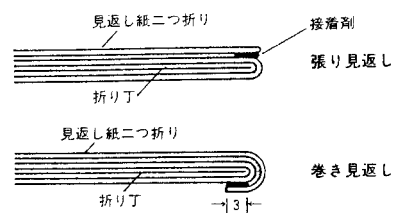


図18 貼り見返しと巻き見返し

丁に貼ることができる。現代の本の大部分が「貼り見返し」になっている。表紙開閉に伴う負荷は2つ折りにした見返し用紙が受けとめ、さらに見返しが貼り付けられた折丁へ転嫁される。

3-6-5. その他の見返し

見返し用紙にマーブル紙や色紙などの装飾用紙を用いることがある。装飾用紙単独で見返しを構成する場合は「とじ見返し」や「貼り見返し」「巻き見返し」として使われている。「とじ見返し」の場合は見返しの装飾紙ノド部にとじ糸を観察することができる。

装飾紙が白色の見返し用紙と複合的に貼り合わされ見返しを構成する場合がある²⁴⁾。「貼り見返し」の白色用紙に装飾用紙が「貼り見返し」で接続している場合と、「とじ見返し」の白色用紙に装飾用紙が「貼り見返し」で接続している場合とがある(図21)。前者は「貼り見返し」、後者は「とじ見返し」として扱う。

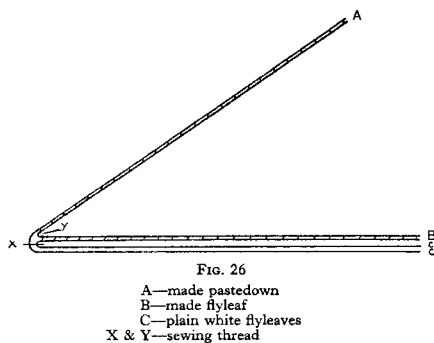


図21 複合的に貼りあわせた見返し

表紙開閉により生じる負荷が集中する見返しノド部を丈夫な布や革などの材料に替えて補強したり、または装飾的意図で見返しノド部に布や革などの材料を用いたりする場合がある。このような見返しを指す「継ぎ見返し」なる用語がある²⁵⁾。「継ぎ見返し」は構造を指す用語ではなく、異なる材料が組み合わされて使われている見返しのことで装丁を指す用語であると考えられる。「とじ見返し」「貼り見返し」「巻き見返し」のそれぞれを「継ぎ見返し」にすることが可能である(図22)。

見返しノド部に丈夫な材料を使うと表紙開閉により生じる負荷への抵抗力が増すと考えられている。

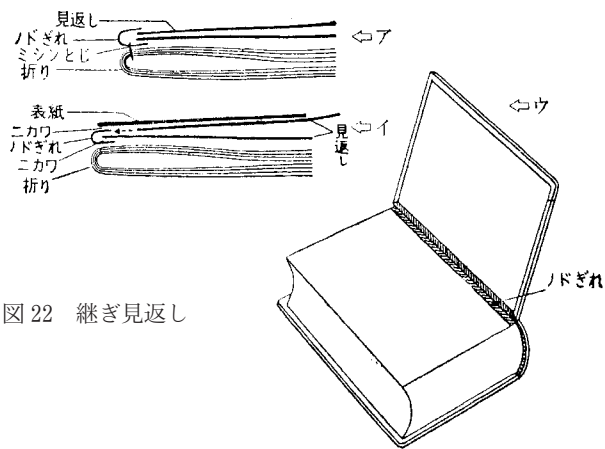


図22 継ぎ見返し

しかし「貼り見返し」のように表紙開閉による負荷が「2つ折りにした見返し用紙が受けとめ、さらに見返しが貼り付けられた折丁へ転嫁される」場合には、転嫁される負荷量も増大すると考えられる。保存作業にとって、「見返し」とは第一義的には構造であり機能である。「見返し」が「中身」に依存する構造になっているのか、「中身」から独立した構造になっているのかということで表紙開閉による負荷を受けとめる意味が異なってくる。上述した貼り合わせによる見返しを白色用紙の見返し構造で区別するのも、このような考えによるものである。

これについては後で詳しく触れることにしたい。

3-7. 背貼り

本をとじたあと「中身と表紙の接続」を行う前または後で本の背に布や紙、革、ベラムなどを貼る。また特に厚い本や重い本などでは背幅に等しい筒状の紙を背に貼ることがある。前者を「背貼り」と称し、後者は「袋背貼り(クータ)」と呼ばれている(以後『クータ』と記す)²⁶⁾。

3-7-1. 背貼り

「背貼り」とは折丁をとじたあとに、本の背幅いっぱい、または本の背幅をはみ出て本の背に布や紙、革、ベラムなどを貼る。「中身」のブロックとしてのまとまりを補完するため、「中身と表紙の接続」を補強するため、または「見返し」ノド部を補強するためなどの目的で行われる。

「支持体を用いるとじ」では、とじ糸どうしが絡んでおらずに支持体が各折丁のあいだに介在するだけなので、couture à point-arrière の「背バンドとじ」を除くと折丁ブロックとしての結合が弱い。背の末端ではとじ糸どうしを絡ませる「端結び」が行われるが、支持体のある場所では支持体ととじ糸の摩擦によって折丁どうしが結合されているだけである（図23）。「中身」のブロックとしてのまとまりを完全なものにするためには「背貼り」によって折丁どうしの結合を補完する必要がある。

「中身と表紙の接続」の補強にも「背貼り」が用いられる。「とじつけ」では「とじ支持体」による「中身と表紙の接続」が行われている。ベラムや手漉き紙の「背貼り」を背幅の両側にはみ出るように貼り、末端を表紙ボードの内側に固定することで「中身と表紙の接続」が補強される（図24）。「とじ支持体」による言わば点による接続は、「背貼り」で面による接続となる。しかも表紙ボードの外側からは表装材が、内側からは「背貼り」と「見返し」が「中身と表紙の接続」を支えることになる。「リンプ装」ではベラムや手漉き紙の「背貼り」を背幅の

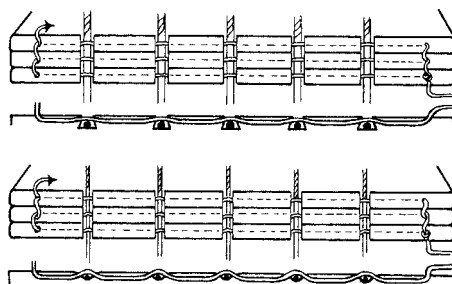


図23 支持体を用いるとじ(かがりとじ)

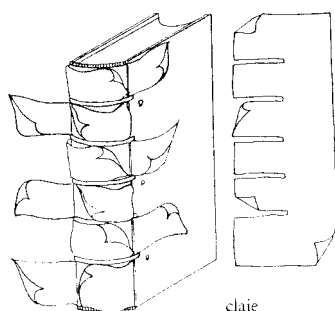


図24 「とじつけ」の背貼り

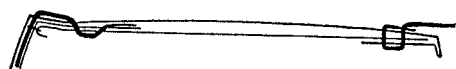


図25 「リンプ装」の背貼り

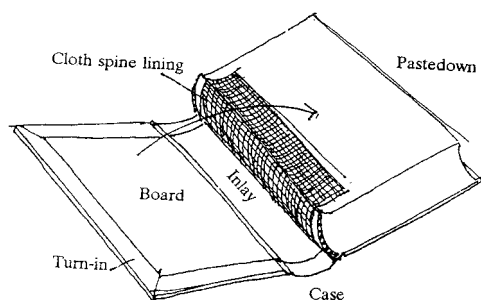


図26 「くるみ製本」の背貼り

両側にはみ出すように貼り、「とじ支持体」が表装材とともに貫いて「中身と表紙の接続」を行うことで補強される（図25）。「くるみ製本」では「見返し」を表紙裏面に接着することでも「中身と表紙の接続」が行われているが、背の両側にはみ出るように貼った布（寒冷紗）や紙の「背貼り」を介して「中身と表紙の接続」が補強される（図26）。

「背貼り」はノド部の補強の役割もしている。背貼りに使われるベラムや手漉き紙には古い本の反故が用いられていることがあるので保存作業時には慎重な判断が必要である。

3-7-2. クータ

本の背と背表紙が接着されていない場合を「腔背（こうぜ）」（Hollow back）と呼んでいる²⁷⁾。本の背は本の開閉にともなって最も激しく動き変形する部分であり、表紙ともつながっている。本の開閉により、凸形の丸みを帯びている背が逆方向に（凹形に）変形して背表紙から乖離するため、背表紙と平表紙の結合部（ジョイント）に大きな負荷がかかる（図 27）。「クータ」はこの負荷を軽減する目的で使われる。「クータ」は背幅に等しい筒状に作られているので本の開閉にともなう背の変形を阻害することがないといわれている。この場合に注意しなければならないのは、本の開閉にともなって変形する背の動きと、クータによって保証される背の動きとが一致しない場合があるということである。たとえば丸背の「くるみ製本」の背の変形は（図 28）のようになるが、クータが動きを保証するのは本の背幅部分のみに過ぎない。

腔背（こうぜ）であるからといってクータが使われているとは限らない。「リンプ装」は常に「腔背（こうぜ）」であるが「クータ」が用いられていない。「クータ」が使われているのは 19 世紀以降の「とじつけ」および「くるみ製本」の一部である。

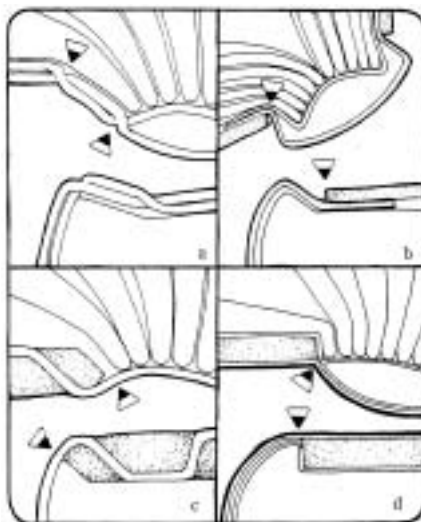


Fig. 10. Cover to text attachment positions: a. laced case construction; b. cased construction; c. wooden boarded, laced construction; d. tight joint, hollow tube, laced construction

図 27 「腔背(こうぜ)」における負荷

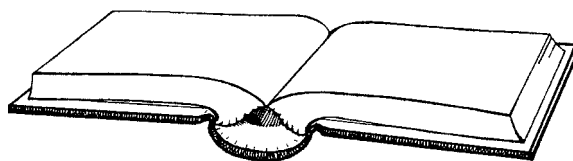


図 28 背の変形

註

- 21) 日本の製本では見返しは「貼り見返し」が一般的であり、表紙ボードに貼った部分を「効き紙」、中身に貼りつけた部分を「遊び」と称している。西洋古典資料として扱う本では「とじ見返し」が一般的で、表紙ボードに貼る装飾用紙の部分を「endpapers（英）」または「gardes couleurs（仏）」、白色紙葉の部分を「fly leaves（英）」または「gardes blanches（仏）」と呼んでいる。ここでは「見返し」はその双方を指す。

- 22) ここでは西欧における中世写本の製本。非西欧文化圏では製本構造が異なっている。
- 23) 中世写本の製本構造については
SZIRMAI, J. A., *The Archaeology of Medieval Bookbinding*. Aldershot, 1999.
- 24) 装飾用紙と白色の見返し用紙を貼り合わせて作る見返しを英語で「made endpapers」と呼んでいる。さまざまなバリエーションがある。MIDDLETON, Bernard. C., *The History of English Craft Bookbinding*. London, 1984.を参照のこと。
- 25) たとえば、牧経雄「製本ダイジェスト」(昭和39年), p. 41~43。
- 26) 「クータ」は「hollow tube (英)」または「dos brisé (仏)」。日本語の語源は不明。ここでは、倉田文夫「趣味の本づくり」(昭和57年), p. 61~62を参考にした。
- 27) CLARKSON, Christopherによれば「腔背(こうぜ)」(Hollow back)にはクータを使わない「natural hollow」とクータを用いた「formed hollow」、それに構造や接着剤の劣化により「とじつけ」の製本が「腔背(こうぜ)」になってしまう場合とがある。CLARKSON, Christopher., *Minimum intervention in treatment of books*. (Preprint from the 9th International Congress of IADA. Copenhagen, August 15-21, 1999.)

図版の出典

- 図10 MIDDLETON, Bernard C., *The restoration of Leather Bindings*. Chicago, 1972.
- 図18 倉田文夫『趣味の本づくり』主婦と生活社 昭和57年
- 図21 MIDDLETON, Bernard C., *A history of English craft bookbinding*, London, 1978.
- 図22 牧経雄『製本ダイジェスト』印刷学会出版部 昭和50年
- 図23 JOHNSON, Arthur W., *The Thames and Hudson Manual of Bookbinding*, London, 1978.
- 図24 DEVAUCHELL, Roger., *La Reliure*. Paris, 1995.
- 図25 CLARKSON, Christopher., *Limp Vellum Binding and its potential as a conservation type structure for the rebinding of early printed books*. Hitchin Herts, 1982.
- 図26 GREENFIELD, Jane., *ABC of bookbinding*. New Castle, 1998.
- 図27 FROST, Gary., 'Mobility and Function in the Codex Bookbinding', in SHARPE, John L., *Roger Powell The Compleat Binder. (Bibliologia 14)*, Tournhout 1996.
- 図28 JOHNSON, Arthur W., *The Thames and Hudson Manual of Bookbinding*, London, 1978.

* 本稿 (1)—No. 20 March 2000 掲載—で図版10の出典が誤っていました。訂正いたします。

(アトリエ・ド・クレ 書籍・紙資料修復家)